
オレの異世界見聞録っ！

くまかんず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレの異世界見聞録っ！

【Nコード】

N4558D

【作者名】

くまかんず

【あらすじ】

無気力な達也、説明文的な文章のこのクラスに、タイミングよく転校生がやってきた！

6月。季節はずれの転校生に、クラスは沸き立っていた。

「どんな子がくるんだろうね？」

「男子らしいよ？しかもめっちゃかわいい！」

「うそー！！超楽しみ！！！」

正直、最初はそんな程度にしか思っていなかったのだ。

間違いだった。

勉強もスポーツも音楽も、彼は全てにおいて完璧だった。

性格はともかく、この3分野では明らかに彼の方が上だった。

バランスがとれているだけで、周りより少しばかり優れていただけだった達也は、たちまち昇吾に追い越された。

悔しかった。

高校ではなにもかもうまくいくと信じていたし、実際この2ヶ月間うまくいっていた。

最初は、彼の欠点を探るためだったのだ。

昇吾が転校してきてからはや1ヶ月。

お互いの親睦を深める、という名目でオレ達は合コンを開いていた。

「おい、昇吾。お前ちよつと飲みすぎだぞ。おかま言葉になってる」

「そんなことないわよー・・・オホホホオ　　うぶ」

マズい。今は女の子たちはウケているが、そのうち本当に引かれてしまう。

そんなことになるわけにはいかない。

オレはいろいろなものを振り絞ってどうにか店から出ることができた。

……人間は見かけによらない。

俺はあくび交じりで

「よし、お前の家まで送ってやるから、バスにのろう。な？」

と言った。せめてもの親切心云々、というよりは、外で凍死しそうだったから。今は冬。この寒い旭川で、しかも今日は真冬日で、間違いなく危なかったのだ。だが昇吾がいない。

コンクリートの地面に突っ伏していたのは、昇吾だった。

彼を引きずって帰るわけにも行かず、かといっておんぶしていくだけの気力はなく。

5分後、お姫様抱っこをしながらオレは駅を目指していた。

腕力がある分、こちらの方が楽なのだ。

悲しいかな、男が男をお姫様抱っこ。近所の人に見られたらね、俺死ぬかも。

あ、でも昇吾は華奢だから女の子に見える……いや、ない。そんな事を考えながら歩いていた達也は、つまづいて転んでしまった。

そろそろ達也にも酔いが回ってきたらしい。

起きたとき、まだ時計は一周もしていなかった。
終電までまだ10本ほど電車もあるではないか。
しかしホッとした達也に、重要な問題がひとつ。

「よく寝たあ……あ」

昇吾が起きた。それ自体は問題ではないし、むしろ歓迎すべきこと
だろう。
だがしかし。

達也の転び方に大きな問題があった。
結果的に昇吾は守れた。守れたが。
達也が昇吾を襲（ry

「えっ！オレそんな覚えはないよ！？冗談だよね！？ね！」
「うわあっ！違う、違うんだ！そんなんじゃない！違う違う！事故
だ！事故！」

そう言ったときに、既に昇吾は涙目だった。

「あ、昇吾、手……」

達也が気づいたのは、昇吾の手のキズだった。

「多分どっかでオレ手ついちゃったんだよ。コンビニでほんそうこ
うでも買って……」

コンビニ？そいうや、ここには家一軒すらない。

さっきまで電灯の明かりで明るかったはずの道は、頼りない月の光
で照らされていた。

目が覚めると、そこにはコンビニはおろか家一軒さえもなかった。

ただ・・・

「何故に曇りなんだ」

「あ、達也、起きたんだ。おはよ。」

「えつと・・・昇吾？」

昇吾は白装束・・・ではなくなぜかかわいいバニーガールの衣装を着ていて、まあ俺もスーツなんだが。しかも砂漠で。

「なんでバニーガールなんだ！！？」

「これ？達也、驚いたでしょお？」

いやそりゃ驚くけどさ。と突っ込んでいる間に、昇吾もスーツになった。

バニーガールの下はやっぱりスーツを着ていて、俺もほっとした。うん。

「で、ここはどこだ？天国か？」

「どこなんだろうねえ」

「一面砂漠で何もなくて、俺は幻覚でも見ているかと思ったぞ。頭を打って今は意識がないんだろうな。それぐらいしか現実的に考えられないだろ」

「ホントにね。これからどうしようか？」

「あー・・・とりあえず川を探しに行こう。こういつ時って、三途の川が見えたってよく言うだろ。折角だから一回見ておこう。」

「さーんせーい」

- - - - -

「ねえ、まだ？もう疲れたよ・・・」

さっきの場所からもう30分。奇跡的に街は見えても、歩けど歩けど一向に距離が縮まらない。

川はあきらめた。せめて街にでも出て、天国を体感しようじゃないか。

昇吾は座りこんでしまつて、砂のお城まで作り始めている。

「これ、かわいいでしょ？達也も入ってみなよっ」

でかい！とにかくでかい！人が入れるぐらいに！

「いやっ、いいから！俺そういうの似合わないし あっ」

俺の目のところまで来ていた手が、一瞬にして消えてしまった。

「昇吾？」

砂のお城に、人が隠れられるようなスペースは存在しない。

じゃあ、これは、まさか？

俺より先に昇吾の意識が戻ったのか？

…だとしたら、俺は一人じゃないか

P a g e 2 : 傳い命!?(旧4)(後書き)

書いててもうすっかり恥ずかしいです!!--!
もう泣きたいよ、
、

かくして俺は、またひとりとなった。

ひとり。

つい数秒前まで、昇吾が目の前ではしゃいでいたのに…

遠くの方に、何か竜巻が見える。

俺、本当に死んじゃうのかな…

こちらにも一瞬強い風が吹いたような気がして、周りを見渡すと、そこはなんと…

「街だ！」

目の前に、あんなに遠かった街が広がっていた。

昇吾は……

「ねえねえ、おねえさん？この街を案内してくれないかな？」
ナンパしてる！！

昇吾のイメージが……

「昇吾……何してるんだ？」

「何してるんだ？ってー。街を案内してもらおうとおもって」

「で、なんでそこで女に話しかけなきゃいけないんだよー！！」

「だってー、すごく優しそうだったんだもん」

この天然野郎め。

「えーと、お連れの方かしら？はじめまして、ウェルディアです。よろしく。」

この街が初めてなのよね。良かったら案内しますよ」
アナウンサー並の滑舌の良さだ。

「ありがとうございます。えっと・・・達也です。こいつは昇吾。よろしく。」

「お金、もってるかしら。この町物価高いのよ」
詐欺だ！！絶対詐欺だ！！あぶねえ！！

「いえ、特に持ってませんけど。生徒手帳ならありますよ？」

生徒手帳かよ ちっ

今なんか言っただぞ！？こいつ絶対危ないって！！
やべえ心拍数180だ、オレ殺されるかも。

「何か？」

「あ、いえ。なんでもないのよ。じゃあ、まずシテイホールに行ってください。」

ココの道をまっすぐ行つて、右に曲がるとすぐあるから」

持ち前の人当たりのよさを發揮して難を逃れた俺達は、とりあえずその

なんだ、シティーホールとやらに向かった。

「ねえ、ココ変だよ。」

唐突に、昇吾がこの世界に疑問を投げかけた。

「だってさ、さっきから国境もなければ警察もないよ？」

「俺らはな、信じられないが今死に掛けているんだぞ？ここは天国しかないだろうが。」

「じゃあなんでこんなに現実臭いかなあ」

なぜかこういうことには鼻が利く。

「知らねえよんなこたあ」

そんな会話を交わしている間に、俺たちは「シティーホール」に付いた。

3階建て・レンガ造り。それは例えられないぐらい美しい。

しかし悲しいかな、現代化。ドアだけ自動ドア。

俺たちは重厚感のある建物いっぱい自動ドアの機械音を響かせて入った。

しかしいきなり目にとびこんできたのは、意に反してバリバリの最新技術。

なんと今話題のICレコーダーだった。なんだこの突然の最新技術は。

「ねえねえ達也、これ聞いてみようよ。なんかの役に立つかもよ？」
「そうだな・・・聞いてみるか」

うわ、まさかの英語。中学3年の時点でA・L・Tと目をあわせられなかったオレにとつての

最初で最後の難関という。自分でもなに言ってるんだ。

「昇吾、お願いシマス・・・」

「もう、しょうがないなあ・・・・・・・・・・」

「ようし、窓口は3番だー！行くぞ天竺へっ」

「テンション高いぞー、どうした」

朗らかに窓口へインした昇吾の表情は、みるみるうちに凍っていった。

職員の説明は、あまりにも理解しがたいものだったらしい。

「・・・わかりですか？なので、現世に戻るのはほぼ不可能と考
えてください。この地図をお渡ししますから、全ての街をまわつ
た後に、またここに戻ってきてください。ゲーム言えばあれです
よ、セーブポイント？」

正式な名前は『ファーストシティーホール』ですから。ではよい旅を
次の方へ、28番の方へ、3番カウンターへどうぞー」

ここが更新されていたら必ずお読みください

更新履歴

- - - - -
- - - - -
- - - - -

1話・2話のエピソードを「page 1 (旧2)」に統合し、
それに伴い

Page 1 (旧2)・2 (旧4)・3 (旧5) に大幅な加筆・

修正を加えました。

(具体的には、現世で外国へワープする部分と地震の部分を削除し、

合コンからそのまま天国?へと飛ぶようになります。)

削除したPage 1・旧3と大幅な修正を加えたPage 1
4につきましたは、原版を

保存してありますので、ご覧になりたい方はコメント欄あたりに
ちよちよつと書き込んでいただければできるだけ早く再掲載
したいと

思います。

作者の勝手な都合で話を書き換えてしまい、本当に申し訳あり
ません。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

(*、) 2008/03/09 13:56 (*、)

4話〜5話までの内容に

修正を加えました。

主に感情の表現に修正を加えています。

なお、おおまかなストーリーにしましては特に変更ありません。

(* 、) 2008 / 01 / 22 16 : 10 (* 、)

1話〜5話までの内容を一部変更しました。

22日以前に各話をご覧になられた方はご注意ください。

なお、おおまかなストーリーにしましては特に変更ありません

雑文

実は1つの話に600文字以上書かなきゃいけないんですよ。

さっき更新してみたらエラーがでて、「600文字以上にしてください。現在532文字です。」

って出てたんです。ぶっちゃけ更新履歴に書くことってないじゃないですか？

もうね。ホントどうしようかと。

だからこの駄文は文字数稼ぎって事で

あ、そうそう。「うちの3姉妹」がアニメ化するらしいです。4月から。

テレ東系みたいなので、我が家でも映るはずですよ。やったあw

ちなみに「純情ロマンチカ」もアニメ化するらしいですけど、あれどうするんでしょうねえ…

P a g e 4 : 一応本編なんです (旧6) (前書き)

早くも6ページ目で番外編というwww

5話まとめて更新した1月より、全く更新のなかった2月のほうがアクセス数が多いんですね。

いやあ、みなさんにはホント感謝感謝です。。。。

これからもしろしく願います!!

ちなみに2月は定期テストでした…。結果は¥(^ o ^) /

「昇吾、どうしたんだ？」

昇吾の顔がみるみる青くなっていく。

「達也、とりあえず外で話そう…」

話を聞いた俺は、1分ほどショックで動けなかった。
もう現世には戻れないのだ。絶対に。

絶対に。

「達也……、大丈夫？」

大丈夫なもんか。

「そ　　けろお」

ん？

「そ　　けろお」

ん？

「達也、どうしたの？」

「し　　れな　　い」

「は？知らない？」

喋れないんだ。言葉が……　　出ないんだよっ

どうしようか。まさか意思の伝達ができないとは。
んー……そうだ、ジェスチャーだ！

「何してんの？なんか新しい遊び？」

違うんだよ、違うんだ！

「だーかーらあ……　もしかして？喋れないとか？ありえないよねえ」
必死に首を縦に振る俺。外から見たらどう思われるんだろう。

「まさかホントに喋れないの？」

そうだって言ってる（やってる）だろ！

「ちよつと待ってて！」

5分後に戻ってきた昇吾が取ってきたのは、紙とペンだった。
ありったけ書きなぐって、昇吾に渡す。

どうだ、わかったか。今のオレの状況が！

「字、汚すぎて読めない」

んだと？

「そんな怖いこと言わないでよあ……てか喋れるんじゃないよあ」
え？オレが？

「あーあーあー、アメンボ青いなあいうえお

おー、喋れた喋れた」
事件解決。

気をよくした俺たちは酒場にとこに入ろうと決めた。

どうせここは日本じゃないはず、ドイツなんかビールは14歳から。

「ねえ達也、ここってホントに酒場なの…？」

「…のはずだ。はず」

いや、おそらく絶対に違うだろう。少し暗めの照明に照らされているのは、ガタイのいいお姉さんたちばかりだ。モリモリの上腕二等筋がいやに目立っている。

「ほら、もしかしたら達也もさ、機会がなきゃ入れないところなんだし、貴重な体験として入っておこう？もうオレ喉かわいて倒れちゃいそうだよ」

「貴重な体験、か。そうだといいいけどな…」

「おにいさん達、やーねえ、そんならそうと早く言ってくれればいいのに。」

おにいさん達カッコイイから、オラサービスしちゃう」

昇吾はチビチビ飲みながらほろ酔い気分だ。周りを見渡してもマトモそうなのは達也だけ。

「サービス…いや、結構です、結構です…」

結局、この後も何度となく『サービス』されそうになり、オレは昇吾を抱えて店を出ざるを得なかった。あのままだら、なんだか死ぬよりもっと大変な方向に行ってしまうそう気がする。

「よし、昇吾。栄養補給も終わったところだし、そろそろ出発しようじゃないか」

「いいけどさ、お供がないよ？お供」

周りにはお供どころか人が一人もない。酒場に入るときはもっと活気があった。

「お供かー・・・まあそのうち見つかるだろ」

「行くところだって決まっていじゃないじゃんかよー」

「ここはどうだ？」

そういつて指差したのは、この町から30kmほど離れた町、「スコールド」だった。

案内板の文字はかすれて読み取るのは難しかった。かろうじて地名と距離だけは読み取れたものの、その下の文字は読み取れない。おそらく町の案内か何かだろう。

「どうやって行くかな… 昇吾、何かいい案はないか？」

「あ、バスが来た！」

酒場^{サカバ}でサービスされそうになり、なんとか抜け出した俺たち。
行き先を決めると、ちょうど良くバスがやってきた。
お決まりの展開。

「このバスはどこに行くんですか？」

「どうしようか迷っているうちに、昇吾が運転手に尋ねていた。

「行くとも、行かないとも。行き先によるね」

「なんてアバウトなバスなんだろう。どこなら行くんだよ。」

「スコールドには行けるか？」

「スコールドか。少し遠いが、行ってやろう。お二人さんかい？」

「お二人さんだよ。どう見たってわかるだろうが。」

「そうか、お二人さんか。仲むつまじいねえ」

「仲むつまじい。仲むつまじい。仲むつまじい…」

「どうみたって男同士だろ！あんたの目は義眼か！」

「なんだ友達同士か、紛らわしい人達だ。まあいい。面白い話もさせてもらったことだし、特別に料金をサービスしようじゃないか」

「確かに昇吾はかわいい。かわいいが、明らかに男だ。しかもそんなにデレデレじゃない！」

「なんで俺がこんなやつと。」

なかなか乗り心地のいいバスに乗りながら、俺は考えていた。

「なあ、昇吾。ひとつ聞きたいことがあるんだ」

「何が？」

昇吾の目がこちらをじつと見つめている。

「現世、というかなんと言つか……の記憶が、だんだん薄れてないか？」

「気のせいじゃない？オレ最後の夕飯もしっかり覚えてるし」
「そりゃあ覚えてるが、もっと大事なことを忘れてる気がする。」

「そうじゃなくてだな、もっとこう……」

喉でつつかえていた言葉がようやく出てきそうになったとき、バスが急停止した。

「お客さん、着きましたよ？スコールド。」

あとちよつとで出そうだったのに。

その街は、予想していたよりずっと大きかった。

見渡す限りの大都会。ビルこそ建っていないが、最初の街よりずっと都会だ。

整然と並ぶ家々、そして町の中心にはビル5階分はありそうな巨大な建物が建っている。

「……天安門」

こういうストーリーでは、たいがい何かその街にある問題をクリアしなければ出られないようになってるのがお決まりなはず……。

そう思った俺は、うまく昇吾を言いくるめて街を散策してみた。

しかしそこは大都会。俺の予想以上に問題となるようなできごともなく、治安も悪くないたって普通の街だった。

シティーホールでもらった案内によれば、その街に滞在してもかまわないらしい。

天国というものがどのような仕組みになっているのか体感するのに、少しの間マンスリーマンションのようなところを借りるのも悪

くない。

「なあ昇吾」

「急にどうしたの？」

「少しの間ここに住んでみないか」

昇吾の目つきが、一瞬変わったような気がした。気のせい・・・だろ。

「ここに？どれくらい住むの？」

「そうだな、一ヶ月つてところか」

一ヶ月もかかるかどうか。

とりあえず不動産屋でも探して、家を見つけよう。

この街の問題を見つけるのはそれからだ。

適当な屋台で腹ごしらえを済ませた後、俺たちは不動産屋に入った。

「すみません」

「はいはい、お待ちしておりました。ウィークリーマンションですよね？ご用意しておりますよ」

この店に来るのは初めてなはず。なぜだ？

「いや、そうなのですが…なぜわかったのですか」

「お役所から通達が来るんですよ。『こういう人がいるから、少しの間部屋を貸してやってくれ』とね。こちらとしては、そりゃあ座っててもお客さんがいらつしゃるんですからね、大歓迎なわけですよ。で、お客さん、どの物件にしますかい」

少々胡散臭いとは思いつつ、金もあまりないので好意に甘えることにした。不動産屋自体も大きく、物件も安くて街の中心部にも程近い物が多かった。

今考えてみれば、できすぎにも限度があるのだが。

「ねえ達也、ここなんかどうかな？」

そういつて昇吾が指差したのは、家賃5万円、家具家電つき、商店街から歩いて5分というなかなかの立地の物件だった。おまけにバス・トイレ付という。

「お客様、いいところに目を付けられましたね。この物件は昨日、前の住人の退去手続きが終わったばかりなんですよ。人気の物件でしてね」

そりゃそうだろう。あとは7万円からしかないのだから。

条件は提示された物件の中で1番良かったので、迷うことなくこの5万円物件に決めた。

「ではお客様、契約の方を」

結局、物件を一回も見ずに契約した。

所詮一ヶ月。どんなに悪いところだろうと、一ヶ月堪えれば良い話だ。

それに、かなり大きい不動産屋だったし、大丈夫だろう。

残念。やっぱりそんなうまい話、あるわけなかった。

「右、右、左、直進、そんなでもって信号渡って左……」
それにしてもすごい勢いで道が入り組んでいる。まるで城下町のようだ。

俺達がしばらく住むマンションは、どうやらそんな昔ながらの雰囲気を残した場所らしい。

古きよき伝統とそれを取り囲むコンクリートの箱。

この感じ、俺は嫌いじゃない。なぜだかわからないが、どこか懐かしい…

多分テレビか何かで見たのだろうか。

「ねえ、達也、オレ頭痛い……」

周りの雰囲気巻き込まれそうになっていた俺は、一気に現実引き戻された。

「しかも所々なんか黒くない？排ガスかなあ」

空は雲ひとつない青空。周りを見渡してみても、ここを彩っているのは太陽の光と淡い夏の香りだけだ。

「大丈夫か？随分歩いたから、疲れているんだろう」

ふと時計を見ると、12時を回っていた。

「あそこのカフェにでも入ろう。いくらか涼しいはずだ」

+++++

（このじゃこませ）

「Bienvenue、お席はどちらがよろしいですか」

そう言っただけ俺達の前に立ったのは、男だった。こういうのは普通女だろうかと思うのだが…。

というよりも、どちらといわれても困る。店内に舞台のようなものがある以外は、イスとテーブルが並べられているだけなのだから。

「どこでもいいから、早く座らせてくれ」

涼しければどこでも良かった。よりによって舞台の前に座らされた俺達は、とりあえずココアを注文するとテーブルに突っ伏した。

舞台では芝居をやっていた。どこか昭和のにおいがするが、なかなか面白いミュージカルだ。

頭が痛くてうなっている昇吾には悪いが、しっかり見物させてもらった。

「あー、技術の×んぽってすごいねえー、涼しいっていいねえ。頭痛いのもとれてきたよ」

「×んぽじゃなくてしんぽだ、進歩」

ココアで鎮痛剤を流し込んだその10分後、昇吾の頭痛はあっけなく消えた。

用もないので俺たちはカフェを出るためにレジへ向かったのだが。

「お会計、2200円になります」

2200円？ココアを2杯頼んだだけで？

「おい、間違えているんじゃないのか」

「間違えておりません、お客様」

ボーイは堂々と宣言する。

「じゃあその内訳を」

「ココアが2つで600円、特別サービス料として500円、お席の方が良い場所でしたので追加で1100円。」

お席が良い場所だあ？

「席はどこでも良い言っただけだ、それに」

ミュージカルに女はいなかったぞ？

「私もどちらとお聞きました。それに、どちらでも良いのなら舞台が良く見えるところが良いのではないかと」

相手ながら思わず感心してしまった。これなら俺達がクレーマーに見える。

どうしようか……。そうだ、これならだましたといえるはず。

「席の位置で追加料金をとるなんて聞いていなかったぞ」

「お席についていただいた後、メニュー表をご覧になった際にわかったはずです」

「何？」

メニュー表をよく見てみると、下の方に注意書きが書いてある。色のついたお席は追加料金をいただきます。

「これはインテリアじゃなかったのか？」

「そうでございます、お客様」

結局店側に隙がなく、俺たちはものすごく損をした気分で店を出た。しょうがなく。

「達也、そんなに落ち込んだら体に毒だよ？舞台料だと思えば何とかなるって」

「それにしても、だ。あんな所でも客が入ってるのはおかしいと思わないか」

店の中は客でこったがえしていて、とても詐欺に会うような店の雰囲気ではなかった。

「うん、思う。何かあるんだね」

「とりあえず家についてから調べてみよう。でも、こんなに腹が立ったのは初めてだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4558d/>

オレの異世界見聞録っ！

2011年1月28日13時18分発行